

特集●総合政策学部の 学習・研究



4年間の学習の総括 平成15年度 卒業論文発表会

2月6日(金)・7日(土)の2日間にわたり、総合政策学部の卒業論文発表会が開催された。例年この時期に4年生の卒業論文の評価をかねて開催されるもので、今年で3回目。第3期卒業予定者109名のうち79名が、それぞれのテーマによる卒業研究の成果を教員や学生の前で発表した。

卒論発表会は、行政・経営コースが1会場、環境・地域コースは2会場(環境政策講座と地域政策講座各1会場)に分かれ、地域政策講座のみ6日・7日の両日、他は6日に午前・午後を通して熱のこもった発表と質疑応答が行われた(詳細は2・3頁)。



CONTENTS

- 総合政策学部における卒業研究
卒論発表会
- おじゃましますゼミ編
- 小針教授ゼミ
- 古川教授ゼミ
- New Intelligence
- 姜光洙 先生
一冊の本
- 三浦黎明 教授
- 三期生の卒業と就職状況
- 数理の世界
- 「セントペテルスブルクのパロドクス」
- キャンパスの生き物
- 「シマヘビ」

行政・経営コース

行政学や法律から経営や金融経済、そして地方自治や住民参加まで。日常生活の根幹をなす重要な社会システムのほとんどに関わる学問を扱う「行政・経営コース」。卒論発表会も、とても広範囲にわたるテーマ内容でした。例えば株式や債券を使った投資戦略、企業における環境会計導入の可能性、あるいは男女雇用均等法や老人福祉政策についての考察。なかにはゲーデルの不完全性定理や微積分など数学的なテーマを取り上げた学生も。もちろんここに挙げたのは、ほんの数例に過ぎません。

生活に密着した社会システムを扱ったものが多い行政・経営コースですが、そのアプローチ方法は数理的かつ科学的。しかし各人も四年間専門知識を深め、調査研究をすすめてきただけに、どの発表も参加者の興味をひくよう工夫されています。中でも印象的だったのは、難しい数学定理にも関わらず会場をおおいに沸かせていた男子学生。学問の楽しさがこちらにも伝わってきました。



環境政策講座

自然環境を人との関わりから検証していく「環境政策講座」。今回の発表会で登場したテーマは、北上五大ダムの富栄養化に始まって、東和町の環境基本計画策定についてや、閉伊川流域の環境保全の取り組み、あるいは浄土



ヶ浜の景観分析や、若手・青森県境の産廃問題など約三十項目。環境問題はもちろん、動植物の美態調査や農林水産業振興、市街地活性化策など選定テーマの多彩さもさることながら、何より調査研究地が広範囲にわたっている点が目を引きました。

机上では実態をつかむのが難しい自然や環境問題について、何度となく現地に出向き、地道な調査を行ってきたでしょう。参加者からの質問も突っ込んだ内容が数多く飛び出しました。

発表ではパワーポイントやOHPを使い、写真や図表などを用いて研究成果を披露。美しい森や海、そしてそこに生きる動植物の写真が、改めて岩手の自然の豊かさを伝えます。発表者の思いや願いも感じる内容でした。

地域政策講座

「地域政策講座」では、卒論発表で最も優れたプレゼンテーションを行った学生を「ベストプレゼンテーション賞」に選定して表彰する取り組みをしています。しかも受賞者にはトロフィーまで進呈。発表者の意気高揚に一役買う粋な計らいです。

防災や交通網整備の問題といった地域計画、現在議論の最中の市町村合併、あるいはグリーンツーリズムや地産地消、NPO法人といった地域活性化方策。さらには環境問題、青少年問題などなど。地域政策講座の卒論テーマは、具体的な社会現象を取り上げたものが多く見られました。発表にも、写真や図表などが多用され、視覚的な説明が行われました。またアンケートや聞き取り調査など、フィールドワークも積極的に行われてきたようです。様々な角度から若手を検証する発表は、ここに暮らす者にとっては興味深いものでした。参加者からの質問も数多く飛び出し、時間オーバーという場面も多々ありました。



おじゃまします
ゼミ編

古川浩一教授
研究室の巻



経営学を柱に問題を発見し
思考する力を養ってほしい

古川ゼミでは、三年生の専門演習の真つ最中。六百ページを超える企業経営学の専門書「コーポレート・ファイナンス」をテキストに、築場俊明さん、西村諭さん、工藤祐貴さん、そして平山和泉さんがそれぞれ分担した各章の発表を行い、全員での討論が行われていた。その中心で、時に発表者に厳しい質問を投げかけ、そしてさりげなく回答を示唆するのが古川先生。現在はこのテキストの熟読が実習の中心だが、既に卒論のテーマ相談も合わせて行われている。

昨年度は六人の学生が古川ゼミに所属し、卒論発表にのぞんだ。現在のメンバーは五人。「まだまだ卒論テーマは漠然としている」という古川先生だが、それぞれにやりたいテーマは見え始めているようだ。「自分の身の回りの事である。これは何だろう」「これを改善したい」など関心を持って、自分で考えるようになってほしいと古川先生は話す。「経営学を幅広い観点で教えてくれるのが古川先生。初めは近付きがたい印象でしたがとても気さくな先生です」と築場さん。飲み会も他ゼミと比べて多いとの二言には、ゼミ生だけでなく先生からも笑いがあつた。

総合政策学部における卒業研究



献を読むなどの準備作業が就職活動と並行する形で行われる。就職活動が一段落する夏以降は、これまでの準備を踏まえて、現地調査など独自の成果を上げるための作業が行われる。その後、論文の締切(二月下旬)までの間に、論文の執筆が行われることとなる。

なお、一部では、例えば大学祭(十月下旬)において一般の人たちを対象に発表の機会が設けられるなど、中間発表の取り組みも行われている(下記「卒論ポスターセッション」参照)。

卒業論文は、学生にとって大学四年間の学習の総括である。卒業研究の成果を卒業論文としてまとめる作業と、その内容について発表する卒論発表会は、これまでの学習を通して、学び、考えたことを総まとめする機会といえよう。

総合政策学部では、行政・経営コース、環境・地域コースのいずれも、三年時から個々の教員ゼミに所属し、講義や演習と並行しながら、より専門的な学習が進められている(下記「おじゃましますゼミ編」参照)。

卒業研究に関する作業は、所属ゼミや学生により多少の相違はみられるものの、多くは次のようなプロセスで取り組まれている。三年の後半頃から四年の前半にかけて、関連文

卒論のテーマは、総合政策学部の特性を反映するように、多様な分野にまたがっている。これまでの卒業生の個々のテーマについては紙面の都合上割愛するものの、コース毎のおおまかな傾向をみると、行政・経営コースでは、行政、法律、経営、経済、財政、金融、会計、住民参加といったものが見られる。一方、環境・地域コースでは、自然、生態などの環境に関するものや、地域計画、地域生活、農山漁村、地域づくり、防災、交通などに関するテーマが多く見られる。いずれのコースも、私たちの生活と関わりの深いテーマが多い点特徴である。

卒論発表会では、一人当たり、十分あるいは十五分の持ち時間が与えられる。ただし、持ち時間の中では、



卒業研究の内容を一方的に報告するだけではなく、教員や参加学生の質問にも答えなければならぬ。

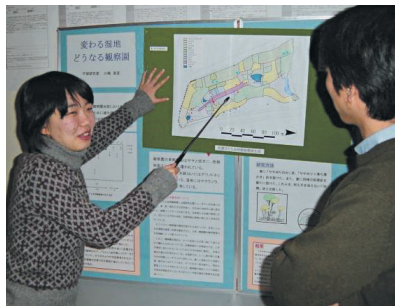
今年度の発表会を見ると、中には、制限時間をオーバーしたり、意表を突く質問に上手く答えられない学生も見られた。しかし、ほとんどは、学んだことや明らかにしたこと、限られた時間で出来る限り伝えようとしていたように思われる。

口頭での説明だけではなく、パソコンや、OHP、スライドなどによる補足資料を使いながら、成果を他の人に分かりやすく伝え、なおかつ他の人の質問に対して的確に答える機会は、学生が大学を出てからもきつと役に立つであろう。卒論発表会の教育上の狙いの一つはこの点にある。

卒論ポスターセッションの開催(環境政策講座)



大学祭「IPU Festa 2003」(二〇〇三年十月二十五・二十六日)において、環境政策講座主催によるポスターセッションが催されました。四年生が、まだ研究途上にある卒業研究のパネル作成・展示と口頭による発表を行ないました。研究紹介はもちろんのこと、来場者の方々とのディスカッションを通して、研究の進め方や新たな視点に気づき、成果が高まることを期待して開かれたものです。七つの研究室に所属する二十四人のポスターには、動植物の生態と保護政策、地域おこし、水環境・廃棄物問題など多岐にわたる研究が紹介されました。



おじゃまします
ゼミ編

小針 司教授
研究室の巻

本人の持ち味を見極め
その個性を伸ばしてやりたい

小針ゼミでは、三年生と四年生が共に専門演習を行っている。本日は、卒論テーマの調査をすすめてきた四年生の清水健一さん、平野裕幸さんと三年生の小岩美奈子さん、阿部諒大さんの状況報告。小針先生から指導を受けながら官報や判例集など研究室の資料も参照し、テーマの方向性や調査方法などを検討していた。「憲法や法律などの論文の成否は、問題設定がきちんとしてできるか、どれだけ具体的なアプローチができるかがポイントになる。しかし、何より本人がテーマに関心を持つことが大事。私は学生にまず委ね、出てきたテーマに対して指導します」と小針先生。三、四年の合同演習も「各人の持ち味を見抜いて伸ばしてやりたい」と考える先生ならではの方式と思われる。

憲法、そして法律という学問的イメージから緊張感あるゼミを想像していた。先生ご自身も「私は厳しいですよ」と言うが、「先生は適切なアドバイスの合間に、とても面白いことを言います」と小岩さん。平野さんも「自分が気付かない問題点も教えてくれる素晴らしい先生」と話す。厳しさの中にあるユーモア。それが小針ゼミの持ち味のようにだ。

「二冊の本」

宇野弘藏編『経済学(上・下)』(一九五六年、角川全書)

三浦 黎明



もともと歴史好きではあったけれども、歴史家になれるとは思わなかった。だから就職の都合を考えて、大学では経済学を選択した。それは一九六一年のことで、所得倍増計画が前年に出され、高度成長のさなかであった。一方ではソ連と社会主義思想の影響も大きく、関心もあった。学生運動が盛んであり、ご多分にもれずいろいろのサークルに入ってみた。マルクス、エンゲルスの「共産党宣言」からはじめて一気に「資本論」まで進んだが、第一章「商品」であえなく挫折した。大学の講義ではマルクス学派が多数派であり、その入門講義は聴いてもよくはわからず、困っていた。

二年生になって宇野弘藏の「経済学」に出会った(一九六二年購入、絶版)。このテキストは初心者向けに工夫されており、まずイギリスを中心として資本主義の歴史的な発展を説く。それは政治的、法律的、文化的要因から独立して資本主義が純粋な形で形成され、確立する過程である。経済学の対象の確立に即して経済学の原理も確立した。しかし、十九世紀末葉になるとこの純粋化傾向が逆転する。経済的なものが再び政治的・法律的な要素と結びつき、埋没していく。そのためその原理を把握することも、理解することも難しくなるという。これは実は宇野の独自の方法論に基づいたものである。

一方で簡単な理論の説明に入る。典型的な資本主義は単なる市場経済ではない。等価交換を前提として、資本は貨幣―商品―貨幣と姿を変えながら、労働力を購入して生産のなかで価値を増殖するからである。その利潤の一部をさらに追加投資して、拡大再生産をする(資本蓄積)。そのさい技術が一定であれば、産業予備軍を動員しても賃金を引き上げ、利潤率を引き下げてしまう。そこで不景気の中での合理化、つまり労働節約的な技術の改善をせざるをえない。こうして景気循環を繰り返



しながら発展(経済成長)していく機構を解明する。資本主義の基本は「労働力の商品化」であり、問題の根源もそこにある、というのが宇野のメッセージである。

これで「経済学」がやっと「わかった」と感じた、思い出の本である。おそらく歴史的説明から入る方法が適していたためであろう。自分にあつた学び方をすれば経済学も理解が進みやすい。私はその後歴史との接点を求めて経済史を学ぶことになった。

経済学の理論も、社会的・歴史的な文脈のなかで形成されるものである。この四十年の間に、近代経済学派が興隆し、マルクス学派は退潮した。大学の講義も重点が変わった。現在では経済学は主として新古典派経済学(主流派経済学)を学ぶ。おそらくマルクス経済学はかつて負わされていた過大な役割は終えたのであろう。しかし、わたしは資本主義の長期的動態を説く一つの学説として、なお学ぶ意味があると思っている。

(本学部教授・日本経済史)

大学・地域間連携の橋渡しに

県立大学で森林・流域フォーラム開催

豊島正幸

昨年11月1日、岩手県立大学を会場にフォーラム「山・森と流域を見つめなおす―人々が出会い連携する場に―」が開催され、平塚教授と筆者が講演とワークショップの世話役を務めた。主催は岩手日報社など東北八新聞社協議会。各県ごとに重点課題を設定し、住民とともに問題の解決方向や活性化の方策を考えていくというのが趣旨であり、3か年企画の1年目である。

フォーラムのテーマとして、岩手の大きな特徴の一つであり、多くの課題を抱えている「森林」を核に据えることにした。参加者は約60名。盛岡市・滝沢村をはじめ遠くは一戸町、湯田町、宮古市から、林家の方々、森林ボランティア、自然保護や自然観察会を実施

している人、行政関係者など様々な立場の方々にご参加いただいた。本学の学生たちも多数参加してくれたことがうれしかった。実際に問題を抱え様々な実践をしている人たちと出会うことは、学生たちにとって現実社会との接点ができるという点で貴重である。これは筆者にとっても然り。

二班に分かれて実施したワークショップでは、森林および景観の保全には、「上・下流が情報を共有し意見を述べ合う場が必要」、「森の維持コストを流域全体で負担する仕組みが必要」など様々な意見や提案が出された。「細分化された既成学問からのアプローチだけでは不十分。社会経済的視点を含めて地域全体を総合的に分析することを大学に求めたい」との要望は、

大学―地域間連携を進めていく上で肝に銘じたい点であり、総合政策学部への期待感として筆者は重く受け止めた。

このフォーラムでの出会いを契機に、森林に関わる諸問題を学生とともに学ぶ行動を起こした。早速11月15日、フォーラム参加者の一人、宮古市の佐々木宏さんの案内で川井村の伐採跡地における作業道崩壊現場を視察。12月13日には、山村生活文化創造・体験施設と呼ぶべき「どん栗村」(一戸町の赤屋敷さんご夫妻)を訪問(写真参照)。



「どん栗村」村長の赤屋敷信一さん(後列右から3人目)

いずれも、机上の学習では味わえない「現実」を身をもって知る貴重な機会となった。

2年目のフォーラム(2004年11月予定)に向けて、このような取り組みを今後も継続しながら、様々な立場の人たちと意見交換できる「場(ネットワーク)」が形づくられていくことを望んでいる。

(本学部教授・自然地理学)

NEW Intelligence

カンガシユ
姜光洙先生

◆プロフィール

法学博士。韓国・国立釜山大学校社会科学大学院修士課程を修了後、94年4月に東京大学大学院研究生として来日。同大学院法学政治学研究所博士課程修了後、日本学術振興会特別研究員、財団法人行政管理研究センター研究員などを経て着任。



昨年十月、講師として県立大に着任された姜光洙先生。一九九四年に来日して以来十年にわたり、日本における行政学・地方自治論の研究を行ってきた。

元々の専門分野は政治学。しかし日本への留学を契機に研究テーマを変更した。「政治学は政治を全体像で捉え、ある意味新たなものを創造していく学問。派手でロマンがあるけ

行政、生活上の問題点は
社会の全体像から捉えるべき

れど、私はもう少し住民や国民に密着した学問がしたかった」という。政治と行政が融合している日本独特の政治システムの形も、テーマのシフトを容易に行えた理由だそう。

「たとえば都道府県知事という存在は、直接選ばれる政治家であると同時に行政の施行者という意味も持っている。この例でもわかるように、日本では政治家と官僚が密接に結びついているのです」と加える。

行政学とは、地方自治のあり方や公務員制度はじめ、私たちの生活に直接関わる、ありとあらゆる政治テーマとその問題点や課題を研究する学問である。そのアプローチの方法は様々だが、姜先生は「全体的な観点で捉えないと問題は見えてこない」という。今話題になっている産廃問題も、法律はどうなっているか、関係官庁の連携は、そして中央と自治体の関係などを捉えた上で議論し、解決策を見いだしていくのが、のぞましいと語る。「地域住民や行政担当者に聞いても全体像はわからない。まずは問題の法則性や科学性などを理解することが大事。私たち研究者には、そういった『理解の方法』を提示する役割があるのです」と姜先生。行政と地域住民、そして研究者が協力して問題解決策を見いだしていくこの手法を、先生は「知政学」と表現する。

「県立大の学生は講義でも集中力があるし、とにかくびっくりするほど真面目。そしてレベルが非常に高

いにも驚きました」と姜先生。またその目の輝きに、教員としてやる気ももたれていると微笑む。この四月からは三年生のゼミが始まるが、大学院時代に受けた講義やゼミで学んだことを生かしていきたいという。

「県立大は公務員を多く輩出する大学。そういう意味でも、より一層行政学の強化を図っていききたいと思います」と意欲的だ。

「学生諸君には、まずたくさん書物を読んで社会や国のことを体系的に理解してほしいと思う。そして、この岩手の素晴らしい自然の中に身を置いてみてください。そこからきっと豊かな創造性も膨らんでいくはず」と姜先生。そう話す先生ご自身毎朝窓から見る岩手山に元氣とやる気をもたらしているのだそう。



特別セミナー「デジタル放送からユビキタス社会へ」

デジタル放送の現況と展望について地域企業とともに知見を深める

1月19日(月)午後3時半から、IPU特別セミナー「デジタル放送からユビキタス社会へ」が、総務省総合通信基盤局電波部長の竹田義行氏を迎え、県立大学講堂において開催された。

このセミナーは、岩手県立大学・岩手県立大学総合政策学会・財団法人岩手県学術研究振興財団の主催、社団法人岩手県工業クラブの共催により、主に地域企業を対象に開催されたものである。当日は雪の降りしきる中、企業関係者をはじめ、学内の教員や学生も多数参加した。なお、セミナーに先立ち、竹田氏による本学学生への特別講義も行われた。

セミナーは、本学部の徳久勲教授の司会で進められた。参加者は、わが国の電波行政やIT政策の立案

責任者の一人である竹田氏の講演を通じて、地上波テレビ放送のデジタル化の現況や、デジタル放送の普及に伴う多様なサービスの可能性などについて知見を深めた。

わが国の放送市場の約8割を占める地上波テレビを、現行のアナログ方式からデジタル方式に変更するメリットとしては、次のようなものがあげられる。

まず、高画質な映像・音声サービスが可能となる。チャンネルの変更で周波数(電波)に余裕がことから、携帯電話などの他の通信に周波数を配分することが可能となり、周波数資源の有効利用につながる。また、番組の選択・加工が可能となることで、欲しい情報をいつでも入手できるようになり、高齢者や障害者に優しいサ

ービスの充実も可能となる。さらに、テレビ受像機とインターネットなどの他の通信網との連携が可能となり、関連する情報家電市場の発展が期待できる。

セミナーでは、総務省で現在進められている実証実験の事例も取り上げられ、地上波テレビ放送のデジタル化が、電子自治体や高度道路交通システム(ITS)など、生活に関する様々なサービスを実現する可能性を有しており、わが国の社会に多大なインパクトをもたらす可能性が示された。

なお、岩手県での地上波デジタル放送の開始と本格的な普及については、2006年末予定の本放送開始と同じ時期になるだろうとの見通しが示された。また、現行のアナログ放送は2011年に終了予

定であるものの、家庭での受信の移行については、デジタル放送対応のチューナーやテレビ受像機の価格が、普及の進展に伴い低下していくとみられることから、アナログ放送終了の時点で大きな混乱は生じないだろうとの見通しが示された。

講演終了後、放送以外も含めた岩手県でのデジタル化の現状や、地方の情報化を進める上での要件について質疑応答が行われた。放送のデジタル化に関する最新動向を知るだけでなく、地域社会における情報技術の意義について考える上でも有意義であったと思われる。

就職談話会

OBの経験に触れる



一月二十四日、就職委員会主催の就職OB談話会が開かれた。

就職状況の厳しさは学生も強く感じているようで、土曜日であるにもかかわらず、三年生だけでなく、一年生、二年生の出席者も少なからずいた。特に、一年生の多さは、学生たちの就職に対する意識が、早い時期から芽生えていることを示しているように思われる。

（一期生、株式会社岩手銀行）、坂本美緒さん（二期生、株式会社三越）の四人を招いて行われた。一人二十分程度の体験談の後、質問を受け付ける形式で行なわれた。OBに就職活動だけではなく、就職後、実際に職場でどういう意識で働いているのかなどを聞くことは、学生達にとって非常に刺激になったようである。

昨今の学生はとくに勤労意欲が足りないなどと言われがちであるが、意識の高い学生が少なからずいることに安心すると同時に、学生達に足りない情報の一つとして、実際の職場環境や実際の仕事に関する情報があげられるのではなかろうか。

就職活動に関しても、採用する側の論理を交えながら説明を受け、年々早くなる就職活動の情報は、学生達にとってかなり衝撃であったようだ。特に、関東圏では三年生の十一月には活動が始まっているということ聞き、ショックを受けた学生がかなりいたようである。

（就職委員会）

全体の話した後、部屋を変え、個別に質問コーナーを設け、ゲストスピーカーそれぞれに、さらに突っ込んだ質問を行なえるようにした。ここでも、相当の議論がされたようである。

学生達は、就職活動が、結局は自分自身のやる気、根気の問題であり、早くから意識を高く持っている者が成功するという当たり前のことを、OBの経験談に触れることによつて確かめることができたようだ。

（本学部助手・ゲーム理論）

参考：ピーター・バーンスタイン（青山護訳）『リスク 神々への反逆』日本経済新聞社

数理の世界 セントペテルスブルクのパラドックス

小井田 伸雄

コインを投げて、1回目に表が出たら1円、2回目に表が出たら2円、3回目に表が出たら4円、…もらえるくじを考える（一般に、n回目に表が出たら、 2^{n-1} 円もらえることになる）。さて、今、このくじと現金100万円のどちらかを得る権利があるとすると、あなたはどちらを選ぶだろうか。続きの文章を読む前に考えて欲しい。

おそらく、ほとんどの読者は、現金を選んだのではないかと思う。訳

の分からないくじをもらうよりは、確実に100万円をもらえる方が良い。100万円と言えば大金（少なくとも筆者にとっては）である。

しかし、パラドックスと呼ばれるからには、これでは終わらない。くじの有利・不利を示す指標として、期待値を学習したことを記憶している読者がいるかもしれない。期待値とは、それぞれの事象が起こる確率と、そのときにもらえる金額を掛け算し、その合計を求めたものである。

それでは、先ほどのくじの期待値は100万円より大きいだろうか、小さいだろうか。左図は、問題のくじにおける賞金の決定方法を表したもので



ある。例えば、4円をもらえる確率は、最初の2回は裏が出る確率 $(1/2 \times 1/2)$ に3回目に表が出る確率 $(1/2)$ を掛けて $(=1/2 \times 1/2 \times 1/2 = 1/8)$ 得られる。同様に考えて、このくじの期待値を求めると、 $(1円をもらえる確率) \times 1 + (2円をもらえる確率) \times 2 + (4円をもらえる確率) \times 4 + \dots = 1/2 \times 1 + 1/2 \times 1/2 \times 2 + 1/2 \times 1/2 \times 1/2 \times 4 + \dots = 1/2 + 1/2 + 1/2 + \dots = \infty$ 円、つまり無限大になってしまう。期待値を計算すると100万円よりはるかに大きいにも関わらず、多くの人は現金100万円を選んてしまう、ということが「パラドックス」と呼ばれる所以である。

18世紀の初めに、この現象について述べたベルヌーイが提唱したのは、人々がくじを好むかどうかの基準として、金額の期待値ではなく、その金額を得たときに主観的に感じ

三期生卒業 アカウンタビリティの自覚を



三月十八日(木)に、学位記授与式が県立大学講堂において行われた。今年度は、総合政策学部百八名、大学院総合政策研究科・博士前期課程十三名が、三期生として新たな一歩を踏み出した。午後一時三十分から行われた学部の学位記授与式では、佐藤香奈さんが、総合政策学部卒業生代表として西澤潤一学長から学位記(卒業証書)を受け取った。午後からは、総合政策学部主催の学位記伝達式が開催され、古川浩一・総合政策学部長から一人一人に学位記が手渡された。古川学部長は、「みなさんの多くは、四月からは、

授業料を払う立場から給料をもらう立場になります。仕事をする上では、アカウンタビリティ(説明責任)が常に求められます。その際に重要なことは、仕事をより良くするにはどうすればよいか、考えながら取り組むことです。社会に出てからも、四年間に学んだことや、自分で考えながら成果をまとめた経験を大事にしてください」と卒業生にエールを送った。

一方、大学院の学位記授与式は、学部の学位記授与式に先立ち、午前十一時から行われ、西澤学長から修士一人一人に学位記が手渡された。大学院博士前期(修士)課程を修了した十三名も、二年間の研究成果を修士論文としてまとめた。二月十六日(月)、十七日(火)に行われた修士論文発表会では、研究テーマの設定や、論証・結論に関わる厳しい質問も出された。学んだことや考えたことを筋道立てて論文にまとめ、発表することに主眼を置く学部の卒業論文とは異なり、まさに学術研究としての意義が審査された。修了生に与えられる学位「修士(総合政策)」は、大学院の所定の単位を修め、修士論文が、学術研究として一応ある程度の水準をクリアしたことを示すものである。

午後六時三十分からは、毎年恒例となった卒業生主催の「卒業記念パ

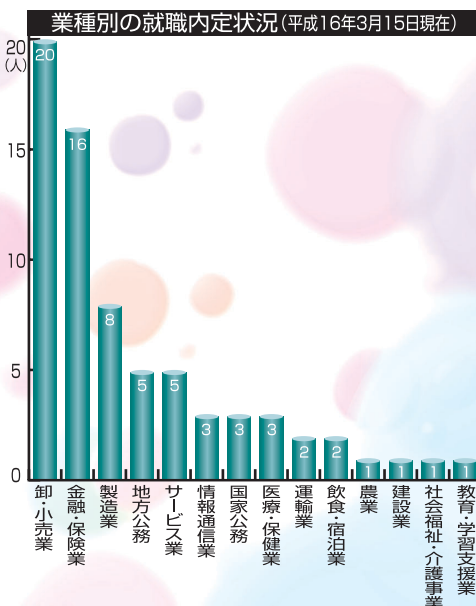


「ティ」が盛岡市内のホテルで行われ、卒業生は、教員とともに学生時代最後のひとときを過ごした。

卒業生の大半は、四月からは社会人となる(下記「平成十五年度の就職状況」参照)。変化が一層激しくなるこれからの時代は、民間企業や公務員などといった業種や、営業や事務などといった組織内での役割にかかわらず、与えられたものを単にこなすだけではなく、より良い成果をあげるために、課題を見つけ、頭を使って考え、解決をはかる能力が、これまで以上に重要となるだろう。より良い成果をあげるには、資格などの形式的なものではなく、自分で考え、工夫し、実行する力がモノをいうはずである。古川学部長のメッセージにもあるように、卒業研究の際に自分で考えながら成果をまとめた経験は、これから社会人として生きていく上で礎の一つになり得るだろう。学生時代の経験を大事にしなから、常にスキルアップをはかっていくって欲しい。

平成15年度の就職状況

総合政策学部就職委員会



景気回復の兆しが見える中ではありますが、本年度の学生の就職活動は昨年度以上に苦労が多かったと思います。若手県内大学生の内定状況は昨年12月現在で1995年以来最低の42.8%となりました。求人数も昨年より少なくなっています。この原因は単に世の中が不況というだけでなく、たとえ企業の業績が好調でも、企業が人件費を抑え、正社員を派遣社員やアルバイトに変え、情報化を行うなど機械化と効率化を目指していることから生じているものと思われます。また、最近企業は新卒の採用者を、採用枠分フルにとることをやめ、欲しい人材がいなければ欠員にして代わりに中途採用者を採用するなど、より厳しい選考を行っています。

このような厳しい状況の中ですが、3月15日現在、総合政策学部4年生の就職希望者89名中76名が内定しており、内定率は85.4%となっています。この数値は必ずしも十分とはいえませんが、昨今の情勢の中ではよく健闘していると思います。内定先の内訳は、公務員が国家・地方合わせて9名、民間が卸・小売業〇〇名、金融・保険業〇〇名、製造業〇名などとなっています(グラフ「業種別の就職内定状況」参照)。就職先では県内が約

62%、岩手県を除く東北18%。東京その他が20%で依然として県内志望の傾向が見られます。しかしこの割合は昨年よりやや減少しており、県外にも目を向けた活動が行われてきたことを示していると思われます。

なお、最近の企業の求人活動は早期化する傾向があり、早いところでは3年生の秋から求人活動を開始しており、その他の企業も影響を受けて人材を確保するために年々求人活動が早期化するという現象があります。学生の教育には好ましい傾向とはいえませんが、社会全体の流れとして大学でも対応せざるを得ません。このため来年度はガイダンスなどをさらに前倒しして行う予定です。

本年度も、事務局の開催する就職ガイダンスのほかに、学部独自の就職支援活動を行いました。5月7日にインターンシップ説明会、7月2日に公務員試験ガイダンス、1月24日には本年度初めてOBを4名招き、職業の実際と受験活動について講演をしていただきました(7頁「就職談話会」参照)。また学部として企業訪問を行い、求人の開拓を行いました。来年度については就職支援のあり方について研究を深め、さらに支援活動を充実させていきたいと考えております。

季節の特徴を表すのに古くから使われているものに二十四節気があります。これは太陽の動きを黄道上の黄経零度(春分)から十五度ずつ刻み、一年を二十四等分した天文学的区分で、それぞれに立春、雨水、啓蟄、春分、清明などの名称がつけられています。この節気間を初候、二候、三候とさらに三等分し、季節の自然を表す説明、例えば、渡り鳥の去来、草花の開花などをつけたものが七十二候で、月の満ち欠けに基づく太陰暦を使用していた時代には、暦と季節のずれを補正し(季節を決定するのは月でなく太陽ですから)、農事の参考にするなど、暮らしの上で重要な役割を果たしていました。二十四節気七十二候は、いわば大まかな太陽暦といえるでしょう。ちなみに「気候」という言葉は二十四節気の「気」と七十二候の「候」が語源ということです。

大学の新学期が始まるのは春分からおよそ半月後の「清明」の頃ですが、逆にその半月前の節気は「啓蟄」です。「啓蟄」とは「蟄虫(冬ごもりしていた虫)戸を啓(ひらく)」の意味で冬眠していた虫が這い出してくる季節という意味です。ヘビはその昔「長虫」と呼ばれていましたので、ヘビやトカゲは蟄虫の代表格といえるでしょう。

ところがヘビやトカゲが地表に姿を見せるのは、サクラの開花時期の前夜で、沖縄をはじめ亜熱帯の鳥々を除けば、どんなに早くても三月中旬以降で、啓蟄の頃、東北地方では彼らは未だ土の下で熟睡中です。このような節気と実際の季節や生物の営みとのずれは、二十四節気の発祥の地が、熱しやすく冷めやすい大陸性気候下にある中国黄河中流域であるのが一因です。

今回登場してもらったシマヘビの初見日は、盛岡付近ではゴールデンウィークのあたり、二十四節気でいえば立夏の頃になるようです。この周辺では最もポピュラーなヘビで、



森林公園で出くわすのは大抵本種です。成体には名前の由来となっている四本の縦じまが明瞭で本種であることがすぐに分かりますが、幼体はこの縞が現れず、別の種に見えます。もう一つの代表的なヘビ、アオダイショウは木のぼりが得意で鳥の卵が好物のようですが、本種は地表性でもつばらカエルやトカゲ、ネズミなどを捕食し、時には他のヘビも食べるようです。日当たりのよい道端や草原で休息しているところを目にする機会が多いのですが、安息をやぶられると尾を振っていかにも不機嫌そうな威嚇音を立てます。気性はかなり荒く、捕まえようとすればよく噛みつきます。無毒なので危険はありませんが、臭い匂いを出すので、出会ったら日向ぼっこの邪魔をしたことを紳士的に詫言、平和的に別れるのが得策といえましょう。

(本学部教授・自然環境行政)

シマヘビ

キャンパスの
生き物・3
幸丸政明

MONTO

●【MONTO】岩手県立大学総合政策学部ニュース Iwate Prefectural University
●第11号：2004年(平成16年)4月6日 ●発行：岩手県立大学総合政策学部
〒020-0193岩手県滝沢村滝沢字菓子15252
代表TEL019-694-2000 学部 019-694-2700 FAX019-694-2701(学部事務室)
印刷/株式会社社陵印刷 TEL019-641-8000

《MONTO WEB版》URL
<http://www.poly.iwate-pu.ac.jp/monto/>
*岩手県立大学のホームページ <http://www.iwate-pu.ac.jp/> から
総合政策学部をクリックして、次にMONTOをクリックしてもアクセスできます。

●編集後記
▼MONTO第十一号をお届けします。ご覧のように、紙面を一新しました。従来に比べて分量的には三割から四割の削減になりますが、記事内容には従来と遜色がないと自負します。また、全頁をカラーとしました▼今号の特集は「総合政策学部の学習・研究」です。学生が四年間に学んだこと、三年からコースに分かれて専門ゼミで研究したこと、それらの総括としての卒業研究・卒業論文。限られた時間内で的確に口頭発表しなければならぬ卒業発表会の様子をご覧いただきました。ゼミ指導の様子も二つ紹介しようか▼依然として厳しい就職状況にありますが、この春果立って行った三期生の就職動向からは、本学部卒業生の健闘振りが伝わってきます▼「森林・流域フォーラム」は教員の研究と社会実践が、参加者を軸に連携している実例といえます。「一冊の本」「教理の世界」▼「キャンパスの生き物」は前号からの連載です。また、昨年十月に学部に着任された姜先生を紹介しました。
●編集スタッフ▶佐藤利明(編集責任者)、植木勉、岡田寛史、山田一裕、佐野嘉彦、堀籠義裕